

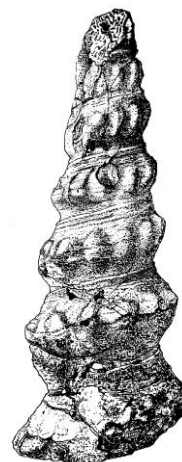
化石館だより



コラム

アカサキエラの幼貝か？

金生山の赤坂石灰岩から産出する巻貝化石の中で最大の殻高（殻頂から殻口の先までの高さ）を誇るのがアカサキエラ・ヤベイです。大きくて見栄えがしますし稀産で手に入りやすく、収集家にとっては大変魅力的な化石の一つです。当館ではレプリカで展示していますが殻高は何と30cmもあります。巻数も多く20巻以上になります。この貝化石は1943年に早坂一郎によってマーチソニア・ヤベイ（*Murchisonia yabei*）として記載されましたが、その後、1977年には速水・加瀬によってラハ（*Raha*）属に移されラハ・ヤベイとなりました。また2012年にはヌツェル・中澤によって、アカサキエラ（*Akasakiella*）という新属が設けられ、現在はアカサキエラ・ヤベイとなっています。種名のヤベイは古生物学に多大な貢献のあった矢部長克（やべひさかつ）に因んだものです。



早坂原図



松屋旅館に飾られていたアカサキエラの化石額

アカサキエラは背の高い円すい形で、そろばん玉を積み重ねたような形状をしており、螺管の中央部を大きなこぶ状の縦肋とスリットバンドに似た筋が取り巻いています。螺管の断面は丸く左右が少しずれる形に並んでいます。写真の化石額は中山道赤坂宿の町中にあった松屋旅館の玄関に長年飾ってあったものですが、アカサキエラの断面が見事に磨き出されています。松屋旅館は江戸の頃から営業していた老舗旅館で、金生山を訪れた多くの学者が利用してきました。種名に用いられている矢部長克もこの旅館に宿泊して金生山の化石を採集しています。

アカサキエラが見つかるのは、ヤベイナと言う大型のフズリナが産出する黒色石灰岩層からですが、この層は赤坂石灰岩の上部層に相当するもので、この上には古生代の最末期に相当する最上部層が堆積しており、その上の梅谷層は中生代の地層となっています。古生代の末には生物の大量絶滅が生じたことが分かっていますが、大量絶滅は上部層と最上部層の境界と最上部層と梅谷層との境界で生じました。赤坂石灰岩の上部層はペルム紀末の生物が最も繁栄していた頃の様子を伝えているのです。

この上部層からはアカサキエラの他にもベレロフォンやナチコプシス、ゾングスピラなどの大型巻貝化石が産出します。また、シカマイアという1mを超える超巨大な二枚貝化石やアルラという大型の二枚貝化石、シーロガステロセラスというオウムガイ化石、プロデンタリウムという角貝化石など、いずれも数十cmにもなる大きな化石がたくさん産出しています。ですから上部層が堆積した時代には生物が巨大化することのできる特殊な環境が整っていたと思われます。それがどのようなものであったのかは明らかにされていませんが、豊富な食料に恵まれ、穏やかで外敵に襲われることも無く天寿を全うすることができたのでしょう。黒色層の黒は有機物由来の炭素とされています。この層にはミッチアと言う石灰藻の化石が多く含まれていますが、石灰藻だけでなくその他の藻類も沢山生えていて、貝類をはじめ多くの生物がこれを食べて生息していたと思われます。また上部層の石灰岩からは、通常の大きさの貝類や数ミリ程度の微小な貝類、貝形虫や有孔虫などの化石もたくさん産出しています。



アカサキエラ幼貝？

金生山化石研究会は大垣市教育委員会の委託を受けて、失われていく赤坂石灰岩の調査を継続しています。その調査の折に採集した石灰泥からは微小な貝類や貝形虫、有孔虫の化石に交じって数cmの貝類化石が見つかることがあります。その一つが写真の巻貝化石です。これは殻高1.6cmの小さな化石で押しつぶされて扁平になっていますが保存状態は良好です。螺管は7層に巻いており、螺管を取り巻くこぶ状の突起やスリットバンドの様な筋が観察できます。外形の特徴に最もよく合致するのは *Costataenina hayasakai* ですがこの種の模式標本は6mm程度の小さなものなので少し疑問に思えます。アカサキエラも同じ科に属し形が良く似ていますので、アカサキエラの幼貝かもしれません。

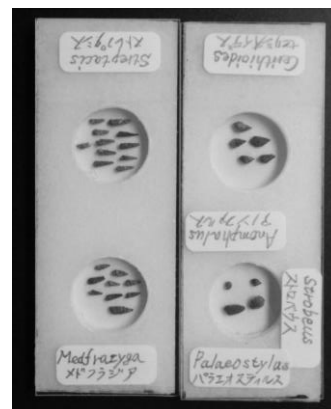
(文責：高木洋一)

お知らせ

微化石観察コーナーオープン

金生山の泥質石灰岩から、単体のフズリナ、貝形虫、巻貝、二枚貝、ウミユリの茎板、ウニの棘など、多種多様な微化石を取り出して観察する体験ができます。

観察した微化石の一部は標本ケースに入れて持ち帰ることも可能です。



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@city.ogaki.lg.jp